

(様式1)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	京都市	番号	14
-------	-----	----	----

推進地区名	推進校名	児童生徒数
京都市	京都府京都市立神川小学校	747名
京都市	京都府京都市立久我の杜小学校	760名
京都市	京都府京都市立羽束師小学校	876名
京都市	京都府京都市立神川中学校	1,173名

○ 調査研究の内容

1. 推進地区における取組

- (1) 京都市学習支援プログラムの実施
- (2) 学力向上チームと推進校による学力情報を中心にした「学力向上推進協議会」の開催
- (3) 学力向上検証会議の開催
- (4) 学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校訪問の実施
- (5) 全国学力・学習状況調査、京都市学習支援プログラムの結果に対する分析支援
- (6) 家庭学習を充実させるための「自学自習のすすめ」の発行

2. 推進校における取組

- (1) 京都市学習支援プログラム(学習確認プログラム、ジョイントプログラム)を活用した学力向上
- (2) 推進校4校による小中9年間を見通した子ども像を共有するための合同研修会の開催
- (3) 算数・数学を中心とした学習研修会の開催
- (4) 家庭教育を中心とした小中一貫スタンダードの開発・策定
- (5) 学力向上チームと推進校による学力情報を中心にした「学力向上推進協議会」の開催

- (6) 年間のP D C Aサイクルに基づいた学習計画である「学力向上プラン」の作成
- (7) 「学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会」による学校運営状況の検証

○調査研究の成果

1. 推進校における取組の成果

- (1) 京都市学習支援プログラムの予習問題を活用した家庭学習の充実や、確認テストによる学習定着状況の振り返り、復習問題を活用しての弱点の克服を推進校全校で取り組むことができた。
- (2) 久我の杜小学校で神川ブロック4校の授業研修会を実施し、算数・数学における授業構成について教職員が共通認識を持つことができた。
- (3) ノート指導や自主学習の取組を全校体制で行い、よいやり方について、教員がコメントを入れ、積極的に掲示していくことで、子どもたちが意欲的に取り組む姿勢が見られてきた。
- (4) 家庭学習習慣の確立のため、神川小学校独自の「家庭学習の手引」を作成し、配布することができた。
- (5) 京都市が設置する、学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会の学校訪問により、学校運営状況や学力向上、小中一貫教育に関する評価や助言を得ることができ、次年度以降の学校経営に活かしていく。

2. 調査研究全体の成果

(1) 学力向上チームと推進校による多角的な面からの分析

学力向上推進協議会が客観的なデータを用意し、そのデータの意味付け・解釈を各推進校の校長が自ら考えをまとめた上で、出席者に対して学校経営ビジョンや取組状況について説明する場として、学力向上推進協議会を開催している。

学力向上推進協議会の開催の効果としては、様々な立場の検証者を多く同席させることで、同じデータを基にした多角的な面からの指摘を行うことができ、各学校が抱える課題への解決策や他校で実践している有効な取組についての「気づき」を誘発させることができた。

とりわけ、各学校の取組に対する説得力とそれを裏付ける各種データにより「少なくともやってみる価値がありそうだ」という自主的な気づきは、各校長にとって極めて価値の高いもので、その後の教職員へ働きかける行動も大いに加速することになると考えている。

(2) 中学校を中心とした小中一貫したマネジメントスタイルの確立

連携型小中一貫教育の核としたい中学校で、各研究指定校の管理職を集めた情報交換会を繰り返し設定することで、中学校を中心としたナレッジマネジメントのスタイルを浸透させることができた。

(3) 4校合同研修会の開催

従来は、輪番で1小学校と1中学校で夏季研修会を開催していたが、文部科学省による調査研究を受託したことを契機に、小中一貫した研修会を開催すること

を促し、今年度はじめて、3小学校1中学校の全教職員が参加した夏季研修会を開催することができた。

(4) 家庭学習を中心とした小中一貫スタンダードの作成

小学校段階からの継続的な家庭学習を確立するため、家庭学習の内容、時間、約束事の3つをベースにした小中一貫教育スタンダードのシートを推進校が開発することができた。

(5) 学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校運営状況の検証

今年度は、常葉大学教職大学院 小松郁夫教授や千葉大学教育学部 天笠茂教授をはじめとした学識経験者、学校代表、市民代表が学校訪問を行い、校長ヒアリングや授業見学から、学校の長所や課題、小中一貫教育の取組状況、児童・生徒の様子(授業参観から)について講評を行い、第三者による学校運営状況を検証することができた。

3. 取組の成果の普及

推進校の取組を全市に普及させるため、取組状況をインターネット上に掲載する。

○ 今後の課題

1 京都市教育員会の課題

- (1) 学力向上チームと推進校による学力向上推進協議会の開催による取組状況の検証・改善により学力を向上させていく
- (2) 言語活動の充実・コミュニケーション能力の育成を支援するため、スーパーサイエンスハイスクールとして指定されている京都市立堀川高等学校と連携した、探究活動指導法研修会を開催する
- (3) 小中一貫教育を推進する研修会の開催
- (4) 全市的な視点での分析や検証による全国学力・学習状況調査研修会の開催
- (5) 小中学校で進路に関する正しい情報を教職員と共有し、家庭学習をより推進させていくため、中学校教員による小学校への公立高等学校入学者選抜制度に関する説明会の実施
- (6) 仮説を基にしながら学校運営状況を改善し、数値による検証ができる体制を支援していくためのアンケート調査システムの開発

2 神川小学校の課題

- (1) ノート指導を徹底するための板書力の向上
ノート指導を徹底し、子どもたちの学習意欲を高めるためには、教員の板書力を磨くことが必要になってくる。板書によって、子どもたちのノート指導も決まるという意識で、板書の意義を考え、学習のポイントがはっきり分かる板書指導と小学校6年間の系統的なノート指導を研究していく。
- (2) 学習規律の徹底
学級が荒れることで、学習の定着が停滞することを防ぐため、学習規律などの

約束ごとは、各学年の発達段階を考慮しながら、全校で統一して臨んでいく。

また、自校に留まらず、3小学校で横の連携を密にしながら、中学校とも月に一度の校長会・教務主任会で児童・生徒の様子を交流し、「学習規律」等のルールに関して交流を図り、推進校全体での学習規律づくりを進めていく。

(3) コミュニケーション能力の向上を意識した取組

本校の研究教科である「算数科」はもちろん、全ての教科・領域においても、コミュニケーション力の育成を意識しながら子どもたちと関わるように心がけていく。算数科や国語科では、話型を共通理解・共通認識し、子どもたちに安心して自分の思いや考えを話せることができるような取組をしていく。

3 久我の杜小学校の課題

(1) 丁寧な習得から、「使う」「活用」への転換

週4回、5校時前の帯時間に算数タイムや全校で同じ問題に取り組む「全校一斉算数タイム」を毎月1回度実施することで、学習のつまづきを減らし、自学自習の習慣化を推進しているが、全国学力・学習状況調査の結果を見ても、国語Aに対して国語Bの指数は6ポイント下回り、算数Aに対して算数Bの指数は7ポイント下回っている。

授業の中で適応題を出す割合を徐々に増やし、「持っている知識」から「使える知識」への転換を促していく。

(2) 学校評価を活用した規範意識と学力に関する評価の焦点化

学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校訪問で指摘されたように、規範意識の低い点と学力について評価を焦点化し、その関係性を分析し、校内に設置している「学力向上プロジェクト」で対応策を次年度以降検討する。

(3) 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を活用した言語力の向上

学校評価では、「自分から進んで本を読んでいます。」の質問に対して、出来ていると答えた児童は、前期が62%だったのに対し、後期は64%とやや改善されたが、まだまだ読書をする児童の数は少ない。

帯タイムの中で、読書タイムや音読タイムの学習を充実させるとともに、児童が図書室を活用しやすくするため、今年度発足した学校運営協議会や図書館ボランティアの力を借りて、言語活動の基礎となる読書量を増やしていく。

4 羽束師小学校の課題

(1) 若手教員の授業力向上

羽束師小学校は、20代教職員が14人、30代教職員が12人おり、学校全体の授業力を向上させるため、フレッシュティーチャー研修会の充実が欠かせない。

フレッシュティーチャーでの公開授業に対しては、各グループのリーダーに誰が声かけ等リードするのかを決め、若手に任せきりにするのではなく、管理職、ベテラン教員が中身をチェックし、助言しながら進めていく体制にする。

また、授業研究、生徒指導を学年で進められているかの声かけを管理職が積極的

に行い、学年主任がリードして学年教員を見ていき、学年経営を徹底していく。

(2) 国語科「B 書くこと」領域における研究

羽束師小学校の課題となっている「B 書くこと」領域については、本校研究部から指導事項をわかりやすく、系統的に表した内容を提案し、それぞれの教員が意識して1年間取り組むことに努めた。

次年度も引き続き「B 書くこと」領域について研究を進め、書くことに対する技術的な指導で終わることがないように、系統立てた指導事項の理解はもちろんのこと、書くことが児童に達成感のもてる授業作りへ挑戦したい。

5 神川中学校の課題

(1) 家庭学習の習慣化

学習確認プログラムの予習・復習問題を活用した自学自習の推進は、改善傾向にあるが、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の結果によると、「平日全く学習をしていない」と答えた生徒の割合が全国平均に比べて、15ポイント高い結果が出ている。「家や図書館で1日30分以上読書をする」と答えた生徒の割合も全国平均に比べて9ポイント低く、依然として学習量は不足している。

また、保護者による学校評価アンケート結果から「家庭学習習慣の定着に努めること」は、最も重要度が高いと回答されているにも関わらず、実現度は低いと回答されている。このことから、生徒、保護者、学校の最重要課題が、家庭での学習習慣の確立であると考えており、学習課題を与え続ける取組を引き続き展開していきたい。

(2) 分かる授業の展開

従来の学習方法では、学習に興味・関心を持ちにくかった子どもたちが、学習に意欲的に取り組むため、電子黒板や見えるもん等のICT機器の活用授業研修会や、教科会を週1回実施して授業力の向上に取り組んできたが、生徒による学校評価アンケート結果からは「授業の内容はよく分かる」の実現度が期待するほど高くなかった。引き続き、校内研究授業および公開授業週間の実施に取り組み、授業内容の改善を行う必要がある。

(様式2)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	京都市	番号	14
-------	-----	----	----

推進地区名	京都市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1. 重点課題

- (1) 京都市学習支援プログラムを活用し、学習規律の徹底や家庭学習の充実を通して、小中学校の緊密な連携の下、9年間を通じて、学力を最大限伸ばす指導の充実。
- (2) 京都市教育委員会で設定している学校教育の重点項目(平成25年度)「言語活動の充実・コミュニケーション能力の育成」、「規律ある生活習慣・ルールを守る態度の育成」を目指した取組の充実を図る。

2. 重点課題への取組状況

- (1) 京都市では、全ての小・中学校で、京都市学習支援プログラム(小3～中3)を実施しており、「出題予定表」や「予習・復習問題集」などを活用して計画的な学習を進め、全校が同一問題の「確認テスト」に取り組み、基礎的・基本的な学習内容の定着を図っている。
今年度は、小学校のプレジョイント・ジョイントプログラムを7回、中学校の学習確認プログラムを6回実施し、推進校の小中一貫した系統的・継続的な学習を支援した。
推進校では、京都市学習支援プログラムの予習問題を活用した家庭学習の充実や、確認テストによる学習定着状況の振り返り、復習問題を活用しての弱点の克服に取り組んだ。
- (2) 平成25年度重点項目実施計画書として、「言語活動の充実・コミュニケーション能力の育成」、「規律ある生活習慣・ルールを守る態度の育成」を具体的に計画するため、各推進校は年度当初に自校の現状と課題を分析し、目指す子ども像を設定して取り組んだ。また、11月に中間評価を実施することで計画の軌道修正を行い、各推進校の目指す子ども像に向け取組を推進した。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 成果の把握、検証方法について

ア 学力チームと推進校による学力向上推進協議会の開催

京都産業大学 栗原 照男教授、京都市教育委員会の担当首席指導主事、参与等の教育職、行政職で構成された「学力向上チーム」と研究指定校との情報交換会を開催し、全国学力・学習状況調査、児童生徒質問紙調査、京都市学習支援プログラ

ムの確認テストの数値を基に、学力向上に関する取組について検証した。

(ア) 第1回会議

日時：平成25年11月6日（水）16時～18時 場所：京都市立神川中学校

(イ) 第2回会議

日時：平成26年2月25日（火）16時～18時 場所：京都市立神川中学校
イ 学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校訪問の実施

京都市における学校評価の第三者評価委員会に位置付けており、今後の学校運営の改善につなげるための課題や改善の方向性等を提示するため、今年度は、推進校4校を訪問し、学力向上に関する取組状況や小中一貫教育を中心に検証した。

【訪問日・訪問者】

11月25日	神川中学校	小松 郁夫	常葉大学教職員大学教授他2名
1月17日	神川小学校	天笠 茂	千葉大学教授他2名
1月20日	羽束師小学校	天笠 茂	千葉大学教授他4名
2月13日	久我の杜小学校	小松 郁夫	常葉大学教職員大学教授
		加藤 明	京都光華大学副学長
		堀内 孜	環太平洋大学副学長他1名

ウ 学力向上検証会議（11月）

京都市教育委員会内（教育長がトップ）に設置し、学力向上推進会議からの推進校についての報告とともに、推進地区全体の状況を踏まえる中で、推進校としての現状及び課題の把握、解決策の検討を行った。

(2) 成果について

ア 学力チームと推進校による学力向上推進協議会による効果

学力向上推進協議会の開催の効果としては、様々な立場の検証者を多く同席させることで、同じデータを基にした多角的な面からの指摘を行うことができ、各学校が抱える課題への解決策や他校で実践している有効な取組についての「気づき」を誘発させることができた。さらには、連携型小中一貫教育の核としたい中学校で、各研究指定校の管理職を集めた情報交換会を繰り返し設定することで、中学校を中心としたナレッジマネジメントのスタイルを教育委員会として浸透させつつある。

イ 家庭学習を中心とした小中一貫スタンダードの作成

推進地域に限らず、自学自習の習慣化が本市の大きな課題として挙げられるが、11月6日に開催した学力向上推進協議会で話題に上った各推進校の家庭学習の取組について、推進地域の実情にあった小学校段階からの継続的な家庭学習を確立するため、各推進校の小中連携主任、研究主任が中心となって、家庭学習の内容、時間、約束事の3つをベースにした小中一貫教育スタンダードのシートを推進校で作成することができた。

ウ 京都市学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校訪問

今年度は、常葉大学教職大学院 小松郁夫教授や千葉大学教育学部 天笠茂教授をはじめとした学識経験者、学校代表、市民代表が学校訪問を行い、校長ヒアリングや授業見学から、学校の長所や課題、小中一貫教育の取組状況、授業参観の様子について講評を行い、第三者による学校運営状況を検証することができた。

エ 研究指定による教職員の意識の変化

神川小学校、久我の杜小学校、羽束師小学校、神川中学校に推進指定校という冠をつけることで、各校の教職員の意識が変化し、校長のリーダーシップが発揮しやすくなり、学校マネジメントが強化されたという意見が学力向上推進協会の中であつ

た。また、取組状況、成果をまとめ、推進校として対外的にも注目されることで、研究の方向性や研究の手だて、検証方法について、推進の中心となる小中連携主任や研究主任などの連携が自主的に推進地域内で行われるようになってきた。

4. 今後の課題

(1) 学力チームと推進校による学力向上推進協議会の開催

久我の杜小学校、神川小学校、羽束師小学校、神川中学校の4校とも、学習の成績は横ばいで推移しており、現在推進している取組が確認テストの結果として目に見える形に表れてはいない。全国学力・学習状況調査、児童生徒質問紙、京都市学習支援プログラムの数値を基に、学力向上推進協議会と研究ブロックとの会議をさらにきめ細かく検証していくため、25年度の年2回から年3回に開催回数を増やし、学力等に関する取組状況について検証、改善を行う。

(2) 探究活動指導法研修会について

言語活動の充実・コミュニケーション能力の育成を支援するため、スーパーサイエンスハイスクールとして指定されている京都市立堀川高等学校と連携していく。堀川高等学校の研究開発成果である「探究活動指導法・問題解決型授業」を活用して、小学校段階から系統的な言語活用能力の育成や学習意欲の向上を図るため、探究活動における課題設定やポスター形式による発表指導に関する研修会を推進校を対象に開催する。

(3) 小中一貫教育推進のための研修会について

千葉大学教育学部 天笠 茂教授による全国的な小中一貫教育の現状、成果と課題について講演していただき、推進校に対して、小中が協力して目指す子ども像を共有することの大切さや、学校評価を活用し、中学校ブロックの共通課題にPDCAサイクルで取り組んでいるかの検証方法を再認識してもらう。

(4) 全国学力・学習状況調査研修会について

調査結果の全市的な視点での分析や検証、実践事例について紹介する等、全市の状況と推進校の調査結果を比較し、今後の取組に活用してもらうため、研修会を開催する。

(5) 中学校教員による小学校への公立高等学校入学者選抜制度に関する説明会

京都市・乙訓地域の公立高等学校入学者選抜制度が、生徒自らが希望する公立高校を選択する制度に変更されるが、小学校教員は子どもたちを卒業させたら自分たちの手を離れたとの意識もあり、中学校卒業後の進路に関しても詳細を知らないという現状がある。

そのため、推進校において、中学校教員による小学校教員への選抜制度を説明する機会を設け、小中の教職員が、9年間の教育に責任を持ち、児童生徒の多様な進路選択を可能にするため、進路に関する正しい情報を教職員と共有し、家庭学習をより推進させていくためにも保護者ともできるだけ早く共有する。

(6) アンケート調査システムの開発

各研究指定校で児童生徒、保護者、教職員を対象にしたアンケート調査の作成や読み取り、集計を簡単に行うシステムを教育委員会が現在開発中であり、新学校評価支援システムを推進校に提供することで、仮説を基にしながら学校運営状況を改善し、数値による検証できる体制を支援していく。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	京都市	番号	14
-------	-----	----	----

推進校名	京都府京都市立神川小学校
------	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

研究課題を進めるにあたって、とりわけ、基礎的・基本的な学力の充実と規律ある学習習慣・ルールを守る態度の育成を重点的に取り組む。

2. 重点課題への取組状況

神川小学校は、平成24年度から「算数科」を研究教科として取り組んでいる。その背景には、「学力定着調査」や「ジョイントプログラム」の結果から見られる、本校児童の学習内容の定着の弱さがあった。その要因を考えたとき、「学習に向う意欲の低さ」「問われている内容を理解する力」「計算力の低さ」などが挙げられた。

算数の学習では、特に各学年での積み上げが必要とされる。しかし、各学年で身につけておかなければならない力が十分ついていないため、次の学年でさらにわからないことが増えるといった悪循環が繰り返されている現状があった。このようなことが要因となって、子どもたちが算数嫌いになっている実態につながっているのではないかと思われる。

(1) ノート指導を中心とした学習づくり

このような実態を踏まえて、子どもたちの学習意欲を高め、「わかった」「できた」という気持ちを持たせるために、「全学年で共通したノート指導」を行い、「自分の学習の足跡が残るノート作り」を意識して取り組んできた。これらの取組を通して、算数の授業の進め方が全校で共通理解されるようになってきた。それと並行して、「授業の中の基本的な話型と聞き方」を提示して、話す意欲や聞く意欲を高めていきたいと考えた。授業を通して、自分一人の考えではなく、みんなで学び合う中で考えが深まり、高まり合っていくような集団解決の場面を1回でも、1人でも多く体験させたいと考え、取り組んでいる状況である。

【ノート作りの統一】



(2) 分かる授業・目にみえる学習展開の工夫

授業に子どもが積極的に向かうよう、教職員が、学習指導の力量を持つとともに、IT機器等を使って児童の興味・関心を高めたわかる授業を目指すため、年8回の校内授業研究会を開催した。また、「今どのような授業をしているのか」、「何を答えればいいのか」などの学習に対する子どもたちの不安感を軽減させ、学習に向かう意欲を高めるため、全校で授業中の板書の統一を図った。

(3) 学習規律の徹底

2年前までは、京都市が実施しているジョイントプログラムの確認テストでも、下位から順番を数えたほうが早かった。分析したところ、小3～4年の間に学級が不安定になり、その間の学習が定着せず、高学年になって学習につまづくというパターンで学力が低位で推移したことが原因であった。その反省を踏まえ、学習姿勢の指導（話す・聞く姿勢）を徹底し、児童が集中して学習できる環境を整える取組を行った。

(4) 児童の思い・考えを文章化する取組の推進

学習の中で、児童の論理的思考力を育成するために、自分の考えを表現する方法(話型、下記まとめ)の約束を図り、指導を統一させた。また、文章を読む力が弱いのが現状であり、読解問題を解ける力を身に付けさせるため、朝読書の時間を設けた。

(5) 計算力をつける取組の推進

掃除時間後の10分間に算数の計算問題を解くチャレンジタイムでは、その学年で身に付けるべき算数の技能が定着するよう反復練習を行った。

(6) 家庭学習の推進

家庭と学校が協力して、子どもたちの家庭学習習慣の確立に取り組むため、地域実態にあわせた神川小学校独自の「家庭学習の手引」を作成して、保護者懇談会等の機会を通じて配布し、家庭への協力を呼びかけた。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 成果の把握，検証方法について

ア 分析等による検証

3年生・4年生 プレジョイントプログラムの結果分析

5年生 ジョイントプログラムの結果分析

6年生 ジョイントプログラムの結果分析

全国学力・学習状況調査の結果分析

イ 学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校訪問調査の実施

(2) 成果について

算数科の授業を通して，課題を与えられたとき，「難しいから」「わからないから」とすぐにあきらめていた子どもたちが，「何とかして自分なりの考えをもちたい」「わかったことは，友だちに伝えたい」と学習に向う姿へ変わってきた。これも，「ノート指導の徹底」と発表をするときの「基本的な話型」を提示し，話しやすく，聞きやすい環境を整えることにより，共に高め合おうとする気持ちや意識が育ってきたからだと考えている。また，今年度から「5分前に行動すること」を子どもたちには日常的に，常に意識をさせて取り組めてきている。朝休み，中間休みは読書タイムを実施し，中間休み，昼休み，清掃時間，チャレンジタイムなど，チャイムが鳴る5分前から，教職員が率先して声をかけてきた。最近では，友だち同士が自然に声をかけ合って動けるようになってきている。特に最上級生の6年生が意識して動き出すことで，下学年の子どもたちも動かざるを得ない状況となり，それが少しずつ習慣化されてきつつある。

4. 今後の課題

(1) ノート指導を徹底するための板書力の向上

ノート指導を徹底し，子どもたちの学習意欲を高めるためには，教員の板書力を磨くことが必要になってくる。板書によって，子どもたちのノート指導も決まるという意識で，板書の意義を考え，学習のポイントがはっきり分かる板書指導と小学校6年間の系統的なノート指導を研究していく。

(2) 学習規律の徹底

学級が荒れることで，学習の定着が停滞することを防ぐため，学習規律などの約束ごとは，各学年の発達段階を考慮しながら，全校で統一して臨んでいく。

また，自校に留まらず，3小学校で横の連携を密にしながら，中学校とも月に一度の校長会・教務主任会で児童・生徒の様子を交流し，「学習規律」等のルールに関して交流を図り，推進校全体での学習規律づくりを進めていく。

(3) コミュニケーション能力の向上を意識した取組

本校の研究教科である「算数科」はもちろん，全ての教科・領域においても，コミュニケーション力の育成を意識しながら子どもたちと関わるように心がけていく。算数科や国語科では，話型を共通理解・共通認識し，子どもたちに安心して自分の思いや考えを話せることができるような取組をしていく。

(様式3)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	京都市	番号	14
-------	-----	----	----

推進校名	京都府京都市立久我の杜小学校
------	----------------

○ 推進校として実施した研究内容

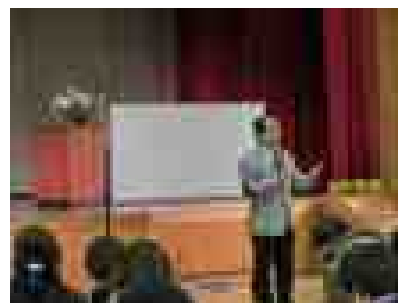
1. 重点課題

小中一貫した学力定着についての取組の推進にあたって、学習規律や家庭学習の徹底を図るとともに、分かる授業・目にみえる学習展開の工夫や児童の思い・考えを文章化する取組を推進する。

2. 重点課題への取組状況

(1) 授業研修会の実施

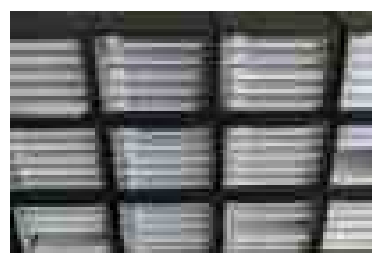
平成23年度から研究教科として取り組んでいる「算数科」の成果をまとめ、より分かる授業・目にみえる学習展開にするため、久我の杜小学校で神川ブロック4校の授業研修会を実施し、矢部敏明鳥取大学副学長による公開授業の指導助言、「算数・数学学習における授業構成のあり方とその展開」をテーマにした講演会を開催した。



(2) 帯時間に取り組んでいる算数タイム

基礎計算力を子どもたちにつけさせるため、週4回、5校時前の帯時間に算数タイムを設定し、教科書の単元構成を反映させた問題プリントを、学年でスタートを決め、番号順に自分で進めて学習していく取組を実施している。前週に自分で問題プリントを何枚やっていくかの目標を決めておき、金曜日にこの週で何枚できたかを振り返り、次週の目標を立てるというPDCAサイクルで学習を進め、自学自習の習慣化を目指している。

また、既習の学習でつまずきがあった場合などは、算数タイムの時間に課題を克服できるよう、該当箇所の番号に戻って取り組ませている。全校で同じ問



子どもたちは棚から問題プリントを自分で取り出して取り組む

- 題に取り組む「全校一斉算数タイム」を9月から毎月1回実施しており、子どもたちが楽しみながら考えを深める場を設定している。
- (3) 意欲を持って学習に取り組むための手だて
- 学力の土台となる学習規律を子どもたちに徹底させるため、学校全体で学習の準備、挨拶、姿勢、ノート指導、発表の仕方や話の聞き方、話し合いの仕方などの学習規律・学習指導全般について、校内で統一を図った。
- (4) 習熟度学習の実施
- 基礎基本の定着を図るために低学年と高学年で週1回本校独自の時間「きらきらタイム」を設定した。また、高学年の時間には低学年の教員が応援に行く指導体制をとった。後期からは京都市が定期的に確認テストを実施しているジョイントプログラムの厳しい結果を受けて、特に5年生には基礎基本の徹底を図るため、「きらきらタイム」に複数の教員が入り、習熟に応じた指導を実施した。
- (5) 校内人材育成プランとして「久我の杜FUTURE」を構築
- 子どもたちに授業の流れが分かる板書の工夫や子どもたちのノート指導ができるようになるため、校内研究を軸として、授業改善・授業力アップをめざし、若手教員の育成の場として設定された「フレッシュ研修会」を中心に位置付けた人材育成プランである久我の杜FUTUREを構築した。
- (6) 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を組織化
- 地域と一体となった久我の杜小学校の取組をさらに推進するため、11月26日に学校運営協議会を設立した。自主学習の支援を目的として、下部組織に「学び支援部」を設置し、地域のボランティアが子どもたちに確かな学力をつけるため、放課後まなび教室や課外活動での支援を行える体制を整えた。
- (7) 基礎的な学力の定着を図る家庭学習の推進
- 自分の考えや友達の考えを整理できるノート指導を校内で統一して行うのはもちろんのこと、家庭でもノートづくりが確かな学力を育む重要さを知ってもらうため、ホームページや学校だよりに「ノートづくりで確かな学力を」を掲載するなど、今後も機会を捉えて、家庭学習の充実を訴えていく。



【久我の杜だよりから抜粋】

3. 調査研究の成果の把握・検証

ア 分析等による検証

3年生・4年生 プレジョイントプログラムの結果分析

5年生 ジョイントプログラムの結果分析

6年生 ジョイントプログラムの結果分析 全国学力・学習状況調査の結果分析

イ 学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校訪問調査の実施

(2) 成果について

久我の杜小学校では、課題への取組について、ジョイントプログラムと学校評価の前期評価と後期評価によって、成果を測っている。ジョイントプログラムの経年変化からは、成績の上昇は見られなかったが、学校評価の前期・後期評価を比較したところ、「分かるまで勉強しようとしていますか」の問いに対して、出来ているが前期67%から後期は72%に上昇している。帯時間に取り組んでいる算数タイムや毎時の取り組みの証であるノート作りの充実によって、知らないことに挑戦したいという前向きな姿勢が、少しずつではあるが培われてきている。

また、保護者からは、「学校便り学級だよりやホームページなどで学校の方針や様子がよく伝わっている。」が前期の74%から後期の87%に上昇し、「学校の取組を理解し、協力しようとしている。」についても、前期の70%から後期の82%へ上昇している。学力を向上させるためには、家庭学習の充実が欠かせないと考えており、積極的に保護者へ周知していく。

4. 今後の課題

(1) 丁寧な習得から、「使う」「活用」への転換

週4回、5校時前の帯時間に算数タイムや全校で同じ問題に取り組む「全校一斉算数タイム」を毎月1回実施し、学習のつまずきの減少、考えること、学ぶ楽しさを実感させて意欲向上を図っている。しかしながら現状は、全国学力・学習状況調査の結果を見ても、国語Aに対して国語Bの指数は6ポイント下回り、算数Aに対して算数Bの指数は7ポイント下回っている。授業の中で適応題に取り組む割合を徐々に増やし、使っていく中でのよさに気付く「持っている知識」から「使える知識」への転換を促していく。

(2) 学校評価を活用した規範意識と学力に関する評価の焦点化

学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校訪問で指摘されたように、規範意識の低い点と学力について評価を焦点化し、その関係性を分析し、校内に設置している「学力向上プロジェクト」で対応策を次年度以降検討する。

(3) 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を活用した言語力の向上

「自分から進んで本を読んでいます。」の質問に対して、出来ていると答えた児童は、前期が62%だったのに対し、後期は64%とやや改善されたが、まだまだ読書をする児童の数は少ない。帯タイムの中で、読書タイムの学習を充実させるとともに、児童が図書室を活用しやすくするため、今年度発足した学校運営協議会の力を借りて、言語活動の基礎となる読書量を増やしていく。

(様式3)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	京都市	番号	14
-------	-----	----	----

推進校名	京都府京都市立羽束師小学校
------	---------------

○ 推進校として実施した研究内容

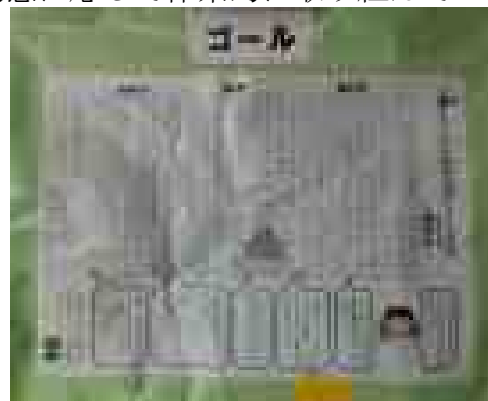
1. 重点課題

小中一貫した学力定着についての取組の推進にあたって、学習規律や家庭学習の徹底を図るとともに、分かる授業・目にみえる学習展開の工夫や児童の思い・考えを文章化する取組を推進する。

2. 重点課題への取組状況

(1) 国語科を中心とした書く力の徹底指導

京都市の全校で実施しているジョイントプログラムの確認テストでは、羽束師小学校は京都市平均に比べ、国語科が1ポイント～6ポイント程度下回っている現状がある。まずは、日常的に行う日記や感想文等の書く機会を昨年度に比べて多くし、国語科だけではなく、生活科その他の教科などにおける学習活動と関連付け、書くことが役に立つ場を設定した。例えば、低学年は「三文日記：文を意識した日記」からはじめ、「三行日記：内容を意識した日記」→「60～100字日記：字数を意識した日記」→「テーマ日記：めあてをもって書く日記」と段階ごとに書く量を増やしていき、学年の実態に応じて体系的に取り組んでいる。



(2) 自主学習，ノート指導の取組

羽束師小学校が今年度取り組んでいる「書く力」を底上げし、学年が上がって

もスムーズに学習に取り組めるようにするため、板書の統一はもちろんのこと、ノートの書き方、自主学習のやり方の基本を学校全体で統一を図っている。

ノートや自主学習には赤ペンを入れ、どの点がよいかということを書いたり、どのようなノート作りを行えばよいかを目に見えるところに掲示することによって、子どもたちがよいノート作りに興味を持つようにしている。また、掲示された子どもは、さらによいノート作りをしようと意欲を持って取り組んでいる。



(3) 毎日20分のステップタイムの活用

帯時間に毎日20分の「ステップタイム」を設け、基礎学力をつけるために活用している。その効果もあって、全国学力・学習状況調査の算数では、数と計算・数量や図形の基礎的内容については概ね良好な結果であったが、応用問題を解く力に課題が見られた。そこで、今年度は週2回程度を全国学力・学習状況調査で過去に出題されたB問題や類似問題にチャレンジするなど、応用問題を解いたり、考え方を具体的に学んだりする機会を与え、自力で問題を解く力を培った。

(4) 学級経営チェックシートの開発

学習意欲を高めるような学習環境を常に整えるため、各担任が学級の状況を点検し、学年主任もダブルチェックする「学級経営チェックシート」を羽束師小学校で開発し、学校で統一した学習環境作りを行っている。

(5) フレッシュティーチャー研修会の実施

授業力・学級経営力・生徒指導力の向上をめざし、相手意識をもって主体的にコミュニケーションできる学習空間をつくることができるよう、若手教員を授業者として2回実施した。今年度は、特にコミュニケーション能力の育成を中心に実施し、単元目標達成に向け工夫した発表の場を各教科の授業の中で設定(2人まなび・グループまなび・全体まなび・相手を選んでのまなび)した。

(6) 教材研究等を行うための時間的な工夫

児童の学力を向上させるには指導者の資質向上が必須で、本年度は、研究教科である「国語科」を中心に児童の学力向上、指導者の資質向上に努めた。

そのために、指導者が主体的に活動できる「空き時間の確保」、空き時間を利用して学び合える「教材研究の指導」、学校が高め合える場とする「仕事分担～若手がアウトプットする場を積極的に設ける～」の3点の工夫を行った。

(7) 学校運営協議会(コミュニティ・スクール)を組織化

校長の立てた学校経営プランを地域全体で共有し、保護者、地域のボランティア

アとの効果的な連携協力によって学習習慣、規範意識を定着させることを目的に、羽東師小学校学校運営協議会を11月22日に設立した。理事会の下部組織として、学び支援部、図書支援部、安全見守り部、ふれあい活動部を設置し、学校・家庭・地域が三位一体となって子どもたちの学びをサポートする体制を整えた。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 成果の把握，検証方法について

ア 分析等による検証

3年生・4年生 プレジョイントプログラムの結果分析

5年生 ジョイントプログラムの結果分析

6年生 ジョイントプログラムの結果分析

全国学力・学習状況調査の結果分析

イ 学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校訪問調査の実施

(2) 成果について

教職員が上記の取組を意識し、継続的に取り組むことで、職場内は温かい雰囲気の下、京都市の指導計画に基づき指導する、基本的な教職員の姿勢が見られるようになってきた。その結果、子どもはどの学年も落ち着いて学習に取り組むことができ、全国学力・学習状況調査やジョイントプログラムの結果が全市平均に近づきつつある。家庭学習についても、学校評価アンケートからは、低学年91%、中学年92%、高学年の93%が「家で宿題や決めた学習ができている」と答えている。学年が進んでも割合が落ち込まず、ほとんどの児童が家庭学習に取り組めており、自主学习、ノート指導の取組が少しずつ定着しつつある。

4. 今後の課題

(1) 若手教員の授業力向上

羽東師小学校は、20代教職員が14人、30代教職員が12人おり、学校全体の授業力を向上させるため、フレッシュティーチャー研修会の充実が欠かせない。

フレッシュティーチャーでの公開授業に対しては、各グループのリーダーに誰が声かけ等リードするのかを決め、若手に任せきりにするのではなく、管理職、ベテラン教員が中身をチェックし、助言しながら進めていく体制にする。

また、授業研究、生徒指導を学年で進められているかの声かけを管理職が積極的に行い、学年主任がリードして学年教員を見ていく、学年経営を徹底していく。

(2) 国語科「B 書くこと」領域における研究

羽東師小学校の課題となっている「B 書くこと」領域については、本校研究部から指導事項をわかりやすく、系統的に表した内容を提案し、それぞれの教員が意識して1年間取り組むことに努めた。次年度も引き続き「B 書くこと」領域について研究を進め、書くことに対する技術的な指導で終わることがないように、系統立てた指導事項の理解はもちろんのこと、書くことが児童に達成感もてる授業作りへ挑戦する。

(様式3)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進校】

都道府県名	京都市	番号	14
-------	-----	----	----

推進校名	京都府京都市立神川中学校
------	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

小中一貫した学力定着についての取組の推進にあたって、学習規律や家庭学習の徹底を図るとともに、分かる授業・目にみえる学習展開の工夫や児童の思い・考えを文章化する取組を推進する。

2. 重点課題への取組状況

(1) 授業改善や指導力向上のための研究授業週間の開催

9月2日～6日の1週間を公開授業週間に定め、各自の担当教科、他教科の授業参観を行い、各教員が他教科との連携を模索し、意見交流できる機会を設けた。

また、9月5日を校内研究授業日に設定し、全ての教科で言語活動を取り入れていくことをテーマに、国語、社会、数学、理科、英語、美術の教科で実施し、研究授業終了後には、研究協議の場を設けた。

(2) 京都市学習支援プログラムの活用の徹底

校下3校の小学校と協力して、小学校で実施しているジョイントプログラムの予習問題を春休みの宿題として6年生に与え、中学校入学までの家庭学習を促すとともに、4月の中学入学と同時に、課題の回収・点検を行い、小中が連携してスムーズに中学校の学習スタイルに移行できるよう取り組んでいる。また、授業の中でも学習確認プログラムの予習問題や過去問題の一部を取り入れ、「学習すればテストの結果にも見える形で返ってくる」ことを意識させ、学習意欲が継続する授業作りに工夫した。

(3) 学力定着を阻むと考えられる要因に対する組織的取組

定期テスト、京都市学習支援プログラム、全国学力・学習状況調査の結果を基に、教科・クラスごとの学力分析を研究部で実施し、テストの難易度の確認、学力低位層の確認、教科内の連携、どの分野でつまづきが見られるかなどのデータ分析を行い、職員会議の機会に現状をまとめ、学校全体で授業改善に取り組んで

いる。また、学校評価による生徒・保護者アンケートを年2回実施し、学校に対するニーズ、課題の把握に努めた。

(4) 計算コンテスト、漢字コンテスト、単語コンテストの取組

定期テストを5回、夏・冬休み明けテストを行い、学習量を増やすよう工夫し、定期テスト1週間前には、国語、数学、英語3教科のコンテストを今年からは始めている。3教科のコンテストはテスト範囲の中から、繰り返し出来る練習問題を作成し、コンテスト前に徹底して練習させ、学年で一斉にテストを行い、成績優秀者にはクラス内で発表するなどして、学習に対する意識を高めている。

(5) 家庭学習を推進させる取組

基礎的基本的な学力の定着を目指すとともに、家庭学習の習慣化を図るため、学年主任が教科ごとの課題を調整し、週のはじめに1週間分の平日課題を全学年で配布している。また、平日課題の内容を基にした小テストを翌週に実施し、基礎問題を解ける力をつけさせている。

(6) 放課後・夏季休暇・冬季を活用した振返り学習会の設定

中学校3年間の学力の基礎となる1年生において、4月に実施した京都市学習支援プログラムや定期テストの結果等を踏まえて、特に基本的な文章読解力や語彙力、計算力の不足が目立つ生徒を対象に、放課後や夏季休暇中に、国語10時間、数学28時間、英語14時間の振返り学習会を設定し、学力の定着を図った。

また、12月の三者懇談会や冬季休暇中に冬季学習会を設定し、学習意欲をさらに高めるために受験を推奨している英検・漢検対策を中心に行った。

3. 調査研究の成果の把握・検証

(1) 成果の把握、検証方法について

ア 比較分析等による検証

1年生 学習確認プログラムの結果分析

2年生 学習確認プログラムの結果分析

3年生 学習確認プログラムの結果分析

全国学力・学習状況調査の結果分析

イ 学校運営協議会及び学校評価に関する検証委員会による学校訪問調査の実施

(2) 成果について

全国学力・学習状況調査や学習確認プログラムの確認テストの結果はほぼ横ばいであるが、学習確認プログラムの予習シート、復習シートの活用率は徐々に改善傾向にある。「確認テストの前に、事前に配られる予習シートを使って、勉強していますか」の質問では、今年度の1年生は82%が活用しており、昨年度の1年生に比べ5ポイント改善された。この傾向は事後学習にも表れており、「フォローアップシートを使って、復習をしていますか。」の質問では、今年度の1年生は65%が活用しており、昨年度の1年生に比べ9ポイント改善された。

これは、小中間での授業研修会の見合いや、小中間の交流の機会を増やしたことで、小学校の授業実践に触れる機会が増え、小中で自学自習の習慣化を意識するこ

とができた結果だと考えている。

学習確認プログラムに関する 生徒アンケート		確認テストの前に、事前に配 られる予習シートを使って、 勉強していますか。	フォローアップシートを 使って、復習をしています か。
1年生	25年度（現在）	82%	65%
2年生	24年度（1年生時）	77%	56%
	25年度（現在）	71%	56%
3年生	23年度（1年生時）	78%	56%
	24年度（2年生時）	68%	48%
	25年度（現在）	72%	51%

4. 今後の課題

(1) 家庭学習の習慣化

学習確認プログラムの予習・復習問題を活用した自学自習の推進は、改善傾向にあるが、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の結果を見ると、「平日全く学習をしていない」と答えた生徒の割合が全国平均に比べて、15ポイント高い結果が出ている。「家や図書館で1日30分以上読書をする」と答えた生徒の割合も全国平均に比べて9ポイント低く、依然として学習量は不足している。

また、保護者による学校評価アンケート結果から「家庭学習習慣の定着に努めること」は、最も重要度が高いと回答されているにも関わらず、実現度は低いと回答されている。このことから、生徒、保護者、学校の最重要課題が、家庭での学習習慣の確立であると考えており、学習課題を与え続ける取組を引き続き展開していきたい。

(2) 分かる授業の展開

従来の学習方法では、学習に興味・関心を持ちにくかった子どもたちが、学習に意欲的に取り組むため、電子黒板や見えるもん等のICT機器の活用授業研修会や、教科会を週1回実施することで、授業力の向上に取り組んできたが、生徒による学校評価アンケートからは「授業の内容はよく分かる」の実現度が期待するほど高くなかった。引き続き、校内研究授業及び公開授業週間の実施に取り組み、授業内容の改善を行う。

平成25年度 生徒アンケート（中間評価）集計

全校調査の一覧表の欄、横に書けてあります

質問文	回答数	割合	全国平均
家庭学習の習慣が定着している	8,87	73%	78%
読書の習慣が定着している	8,87	67%	76%
生活の記録が定着している	8,20	74%	71%
算数の学習が定着している	8,87	64%	68%
英語の学習が定着している	8,88	67%	66%
理科の学習が定着している	8,87	64%	68%
家庭学習の習慣が定着している	8,87	64%	68%
算数の学習が定着している	8,87	64%	68%
英語の学習が定着している	8,87	64%	68%
理科の学習が定着している	8,87	64%	68%
家庭学習の習慣が定着している	8,87	64%	68%
算数の学習が定着している	8,87	64%	68%
英語の学習が定着している	8,87	64%	68%
理科の学習が定着している	8,87	64%	68%

家庭学習の習慣が定着している
読書の習慣が定着している
生活の記録が定着している
算数の学習が定着している
英語の学習が定着している
理科の学習が定着している

家庭学習の習慣が定着している
読書の習慣が定着している
生活の記録が定着している
算数の学習が定着している
英語の学習が定着している
理科の学習が定着している